

「それでも、信じたい」
マルコによる福音書 9：21－27

本日の召天者記念礼拝では、先に召された方々を覚えながら、「信仰とは何か」を共に考えたいと思います。

映画『教皇選挙』では、新しい教皇を選ぶために集まった枢機卿たちが、それぞれの立場を主張し、対立します。選挙を前にローレンス枢機卿は、何よりも恐れる罪は「確信すること」だと語ります。自分こそ正しいと確信しすぎれば、他者を受け入れられなくなる。そして、信仰は疑いと共に歩むからこそ生きたものになると言うのです。しかし、信仰とは疑わずに信じることではないのでしょうか。

今日の聖書には、苦しむ息子を連れてイエスのもとに来た父親が登場します。弟子たちにも息子を助けられず、父親は「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください」と願います。信じたいけれど、信じきれない。その父親にイエスが「信じる者には何でもできる」と語ると、父親は「信じます。信仰のないわたしをお助けください」と叫びました。

この矛盾するような言葉には、私たち自身の姿が映されています。神を信じていても、祈りが聞かれているのか分からず、苦しみの中で神を疑うことがあります。死を超えた命についても、信じたいと思いながら確信できないことがあります。それは信仰生活の長い人も同じです。父親はそんな弱さを隠さず、信じきれない自分自身をイエスに差し出しました。

聖書には、神に「なぜですか」と問い続ける人々が登場します。イエスご自身も十字架の上で、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。それは単に神を疑った言葉ではありません。深い苦しみの中でも、なお「わが神」と呼びかけ、神に向かう祈りです。信仰とは疑いが一切なくなるのではなく、分からないことを抱えながらも神に向かい、助けを求めることなのです。

また、自分にも分からないことがあり、間違えることがあると知れば、他者の疑いや迷いにも寛容になれるでしょう。神を信じることと、神のことをすべて理解していることは違います。私たちも、不完全な信仰のままでキリストに受け止められているのです。

そして大切なのは、父親の信仰が強かったから息子が救われたのではないことです。イエスがその子の手を取って立ち上がらせたのです。

私たちの信仰は揺れます。それでも神の愛は揺らぎません。私たちを支えるのは、揺るぎない自分の確信ではなく、弱い私たちを受け止めるイエス・キリストです。だからこそ、「信じます。信仰のないわたしをお助けください」と祈ることができます。

信じたい。けれども、信じきれない。それでも信じたい。そのような私たちを、主は今日も支え、導いてくださるのです。